

痛学痛勤電車

和宮龍太郎

七時

昨日徹夜なんかしなかったらよかったと今更しても遅い後悔をしながら文段郎（ぶんなぐろう）は最寄りの駅まで走った。早朝とはいえ太陽は無情にもさんさんと輝いていた。

七時十五分

汗でびっしょり濡れたカッターシャツが皮膚にへばりついていて。走り終えた後のこの不快な気持ちは、この重たいスーツのせいである。

「ああ、さわやかな朝が台無しや」と段郎は嘆いた。「汗でカッターシャツしぼれるんちゃうかな」

嘆き終わった所で、もうひとつ忘れてはならない事実が頭をよぎった。「そうや。ほんま今日は朝からダブルパンチやな」

朝のラッシュ。サラリーマンには生き地獄のようなものだ。見ず知らずの人の体との接触は心地よいとは言えず、まして麗しき乙女ならまだしも自分と同じように加齢臭を放つ汗だくの親父と肌と肌をこすり合わさなければならないのだ。何が楽しい。何が愉快だ。混雑率はおそらく二百%以上、手も足も動かさず苦しい思いをしなければならないのだ。高い定期代を支払っているのに、なにゆえサービスが悪いのだ、といつも彼はやり場のない怒りをもみ消さなくてはならなかった。

「まもなく一番乗り場に七時二十分発○方面×行きが参ります。黄色い線までお下がりください」

聞き慣れた駅員のアナウンスにもうんざりであったが、今日はいつもとは違った。いや走って駅まで来たことではない。麗しき乙女が彼の目の前に立っていたのだ。黒髪で長いストレート、くびれがはっきりと強調されるタイトな白いワイシャツを着こなし仕事のできる女性に映った。白いワイシャツからうっすらと無色のキャミソールが透けて見えた。

「なんや。悪いことばかりやないな。仏さんに感謝や」彼は心の中でそう言うと、別にセクハラする気ではないが、いつも親父と体を密着させるのは嫌なので、麗しき乙女の後から今にも破裂しそうな電車に乗り込んでいった。乗車時にはなるべく流れに身を任せなければならない、と段郎は心に言い聞かせた。がつがつ乗り込む唯我独尊タイプの乗客は他の乗客から睨みつけられることがあるからであった。満員電車の中ではなるべく自分を消さなければならなかった。最後尾の乗客が駅員に押し込まれた勢いでバランスを崩し、その足を踏まれた乗客がキャンと鳴いた。段郎は実家の押し入れを思い出した。

乙女が目の前に居るので気分は上々であったが、満員電車の中はすぐに人々の熱気でムツとなり、クーラーの風が直接当たって段郎は気分が悪くなった。目眩がした。彼は両手を万歳しながら、高い定期代を払っているのに、ともう一度やり場のない怒りを噛み殺した。

黒髪麗子（くろかみれいこ）は満員電車には二度と乗りたくないと思っていた。というのもちょうど三日前に朝にラッシュ時の電車内でセクハラをされたからであった。時間にした約五分間

、彼女は自分の尻を触られた。実に奇妙な感覚、朝から不愉快極まりなく痴漢野郎を殺したい衝動に駆られたが、面倒を起こすのも恥ずかしいのでそのまま痴漢野郎を放置した。

しかし、大事な書類を家に忘れいったん戻ったので、今日はこうして不本意ながらブタ箱で通勤しなければならなくなった。

「今日わたしのかわいいお尻に触った奴はゆるさないんだから」満員電車に乗らざるをえなくなり、麗子はいつそう鼻息を荒くした。

そんなことは考えていたものだから、文段郎が彼女のハイヒールを踏んだ時、彼女は自分でも驚くほど段郎を睨みつけていた。

七時二十四分

突然電車がガタンと左右に揺れた。「ここはいつも大きく揺れるとこやねん」毆郎がいつも気をつけているポイントではあるが、つり革を上手くつかみ損ねた乗客にとっては魔のカーブである。彼の後ろからものすごい勢いで飛んでくる乗客を横目で見た。おそらく足幅が小さくバランスを取れなかったのだろう、毆郎は一瞬そういうことを考えたが、何しろこちらに向かって飛んできていたので避けなければならなかった。しかし混雑率二百%以上の満員電車でそんなスペースはもちろんなかった。彼は腹にできるだけ力を込めて飛んでくる乗客を受け止めた。足幅がもう五十センチ大きければドミノ倒しを避けることができていたのかもしれない。毆郎は力なく崩れ、その前にいた麗子に危険な連鎖は波及し、またその前の…と繋がっていった。

車内は騒然とし混沌とした状態となったが、人間ドミノが最短距離で壁の方に近づき誰も床に倒れることなく踏ん張ったということもあって、一瞬車内が騒然としただけであり、騒ぎは一瞬で収まった。

壁際で人間ドミノの最後の犠牲者となった短気な学生、光結圧（こうけつあつ）は頭を壁に強打し人間ドミノの発生源を恨んだ。「ちっ」彼は短く舌打ちをして頭を下に向けて目を閉じた。昨日はサークルの飲み会で、気になっている女の子の前で良い所を見せようとしたのが悪かった。ビール、日本酒、ワイン、カクテル…目の前に並べてある酒は全て飲んだ。そのせいで昨日というか今日どうやって家に帰ったのかも分からないし、電車が揺れているのか自分が揺れているのかも分からなかった。もう床に座ってしまおう、と彼は考えたが、電車内で座ってしまうと何か大切なものを失ってしまうような気がした。

今日の三限目は微積分のテストであった。受験でアドバンテージがあるもののやはり分からないことが多いので、友達に質問をするために早起きをして学校に向かっていた。

そのため、彼は人身事故かなにかで電車が遅れないように祈っていた。他の鉄道会社に比べこの鉄道会社は遅延が多いという噂がたっていたのだ。今日、電車が遅れると友達に質問できずにテストを受けなければならない。余裕を持って勉強していればそのような事態は起こらないはずだが、その時は潔く鉄道会社のせいにするのだ。せめてもの情けである。

七時三十分

電車が急ブレーキを掛けた。何人かの乗客が前へつんのめった。乗客がふらつき、コツコツ、まるでタップダンスのように音が鳴った。左側の窓からは病院が見えた。これにはベテラン通勤者の毬郎や麗子にも訳が分からなかった。嫌な予感が毬郎の体中に駆け巡った。「まさか…」

ほかの通勤通学者も心配そうに外を眺めていた。彼らは聞きたくない悪魔のアナウンスをただ待つしかなかった。

「ただいま、五号車で緊急停車ボタンが押されました。確認を取りますのでしばらくお待ちください」

音にもならないため息があちらこちらで聞こえるのが毬郎には分かった。ブタ箱に閉じ込められた哀れな者たちは一斉に携帯を取り出し、上司、同僚、友人に連絡を取り始めた。毬郎、麗子も連絡を取り始めた。

その傍らを車掌室から出てきた車掌が五号車へと人をかき分け、一人行軍していた。

七時三十三分

まだ三分しか経っていないが閉じ込められたものには永遠の時間に感じるのであった。

毬郎や麗子が乗車した駅よりも前の駅で乗車した文句足造（もんくたれぞう）は頭を抱えていた。「今日は大事な会議やさかい、絶対に遅れられへん。」頭を掻きむしっていた彼の焦りは、鉄道会社への怒りへと変化していった。この感情の飛躍はもはや足造でさえも説明がつかなかった。「ああ、いつもそうや。この電車は。昨日かて人身事故ではよ家に帰れるはずやったのに帰ったら十一時や」

彼の周りでは、自分と同じ境遇であろうサラリーマンが電話を掛け出社に間に合わないことを詫びていた。

「わしがびしっと言ったらなあかん」それから足造の行動は実に迅速であった。鉄道会社の携帯ホームページにアクセスしてカスタマーサービスの電話番号を調べていた。

七時三十七分

中年サラリーマンと女子高校生が車掌につれられ、前方の車両から戻ってきた。麗子は嫌悪感を隠せずにはいられなかった。「ほんと男って」

ストレスで湯気が立ちこめた車内は暑苦しく息苦しかった。湯気を切り裂くように車掌のアナウンスが鳴り響いた。

「ただいまから列車の運転を再開します。人員引き渡しのため、次の駅で停車します。下車できませんのでご注意ください」

七時四十分

「おい、お前がカスタマーサービスのもんか」電車がようやく走り始めた頃、足造は大声で言った。どうやら電話をしているらしかった。殴郎、麗子を含めた乗客は足造の方へ顔を向けた。ほとんど全員が足造に注目していた。

「たかが痴漢でなんで緊急停止で、止まん駅でも止まらなあかんねん。たかが痴漢やぞ」足造はまくしたてた。「ええか、わしはこれから大事な会議やねん。遅れたらお前らのせいやぞ」

足造の激しさを増す熱弁に誰もがポカンと口を開けている中、麗子だけは彼に殺気すら漂う気配で足造を睨みつけていた。

殴郎は、髪の毛の一本一本が逆立ち頬を紅潮させた麗子に気がついた。彼は足造の苦情電話をはっきり聞いていたから容易に麗子の気持ちを察することができた。たかがセクハラ、という男性サラリーマンに女性が怒りの矛先を向けるのは至極当然である、と彼は思った。

麗子は腹の底から煮えくり返った得体の知れないものが体にまとわりつくのがわかった。これを脱ぎ去るにはもう方法は一つしかない。麗子は電話をしている男性の方へ向かい、足造の胸元をグイッと手前に引っ張り、阿修羅のごとき形相で足造を睨みつけた。麗子の目に映るのは、情けなく禿げた頭の中年男性である。「そんな発想でしか考えられないの、男って」麗子の目は赤く充血していき、力を込めてえいっと足造を持ち上げた。

足造は中吊り広告と一緒に吊るされた。そして車両と車両をつなぐドアから女医、女性政治家、モデル、女性車掌、女性プロレスラー、女性キャスターなど社会で男性と、いや男性より活躍している人たちが続々登場してくる。満員電車はさらに満員となり定員をもうすでに超えて、殴郎たちが乗る車両は風船のように膨らんでいた。

「なんやこれ？」もう殴郎にもわけがわからない。黒髪の非力な女性が女性とは思えぬ力で、文句を言っていた男性を持ち上げたのだ。「あの中吊り広告に晒し上げられた男性は、確かに女性の敵や。でも、見せしめにするのは…」気付くと殴郎の前にはあの黒髪できれいな乙女だと思っていた女性が立っていた。この場合、過去形で表現するのが適正である。「貴様も同罪」と聞こえたような気がする。がつんと顎に正拳をくらい、目の前に星が飛んで暗くなったかと思うと体が宙に浮いていた。息が苦しい。殴郎のネクタイは中吊り広告と一緒に括り付けられていた。そして隣にはあの中年男性もネクタイを中吊り広告に括り付けられ、顔と両手はだらんと地面に垂れていた。そして前には同じような格好で若い大学生風の男性が掛けられていた。サラリーマン・男子大学生・男子高校生・行楽巡りのおじいちゃんといった車両に乗った全ての男性が中吊り広告と一緒に掛けられた。その下では女性たちが軍隊のように一糸乱れぬ有様で行進し、その中の一人が「女性万歳！」と叫んだ。

七時五十分

もうすぐ駅に到着するところである。目を覚ました殴郎は彼女たちに闘いを挑むことを決意した。あと三分で駅に着くからその間にケリをつけたら、殴郎は鼻息を荒くして、女性たちに最後の闘いを挑むことを決意した。どうやら他の男たちはまだ目を覚ましておらず、いやあまりの恐怖に気絶しているふりをしているのかもしれない。「これ以上やらせてたまるか。俺は会社に行く」彼は中吊り広告に巻き付けられたネクタイを外し下に降りた。しかし降りたところは地獄。殴郎の中に黒い恐怖の塊が入り込み、すぐにいっぱいになった。あれワシってこんなに小さいんか？気絶していた方がまだましやったな、蛇に睨まれたらこうなるんや…周りにはとてつもない威圧感を放つ女性軍団がひしめき合い、もう身動きすることもままならない。つい三十秒前の自分を責めたくなかったがもう遅い。後頭部に一発くらい一瞬くらっとしたがここでこらえなければ前には進めない。まず右斜め前にいた女性を右フックで、さらに前方の女性に左アッパーで一発くらわした。女性の血が窓に飛び散った。しかしその間にまたもや後頭部にパンチをくらい、鼻から赤い血がドバーっと出て、意識が朦朧となった。今度は前方の女性に膝蹴りをくらい、殴郎は鼻が取れた、と思った。手で自分の鼻を確認して、回し蹴りでしつこく後頭部を狙ってくる女性を倒した。しかし、次々と自分より体格の大きい女性が来るものだから、これが夢であって欲しい、殴郎は切に願った。痛みは時間が経つほど鮮明になってくるし、感覚もしっかりしている。もうダメだ、ワシはここで倒れてしまうかもしれん。オラァという叫び声とともにローキックがきれいに殴郎の右足にヒットし、バギッと重たい音が鳴った。殴郎の足は粉々になり、無惨にも膝をついた。

七時五十四分

「■■■に到着致します」

誰かが白いタオルを投げた。ドアが開き、風が入ってくる。女性たちは規律正しく外へ出た。風船のように膨らんだ車両はみるみる収縮し、いつもの車両に戻っていった。軍団の姿はもはやなく、車両には、無数の男性の吊るされた姿と、膝をついた殴郎の姿があった。